

リボルバー

2008(平成20)年5月9日鑑賞〈角川映画試写室〉

★★★



監督・脚本＝ガイ・リッチー／製作・脚色＝リュック・ベッソン／出演＝ジェイソン・ステイサム／レイ・リオッタ／ヴィンセント・パスターレ／アンドレ・ベンジャミン／マーク・ストロング／トム・ウー／テレンス・メイナード／フランチェスカ・アニス／アンドリュウ・ハワード／エレイナ・ビニッシュ（アステア、アスマック・エース配給／2005年イギリス、フランス映画／115分）

……「最大の敵は思いがけぬ場所に隠れている」など、4つの教訓を軸とした騙し騙されの世界は、『アフタースクール』（07年）と同じで結構面白いが、両者の違いは……？ また、私は（『シックス・センス』＋『T.R.Y.』）÷2＝『リボルバー』と見たが、異論は……？ 最大の難点は、やたら登場する「心の声」のうとうしさだが、さてあなたは……？



『リボルバー』は『シックス・センス』の系譜！

インド生まれの監督M・ナイト・シャマランを一躍有名にした『シックス・センス』（99年）は、「監督からの観客に対する謎解きのチャレンジ」というスタイルで映画界に衝撃をもたらした。したがってこの映画に限っては、「ネタバレ厳禁」が絶対となり、「結末は絶対にしゃべらないで下さい」が売り文句となって、大きな宣伝効果を呼んだほど。

しかして、「彼は君だ！」をテーマとする、わかったようなわからないような映画(?)『リボルバー』は、まちがいにその系譜。つまり、観客は否応なく何が現実で何が幻想なのかについて、自己責任による判断を迫られることに……。



『リボルバー』は『T.R.Y.』の系譜！

他方、この映画の面白いところは、主人公ジェイク・グリーン（ジェイソン・ステイサム）が「究極の勝利の方程式」を身につけた男だということ。希代のペテン師という主人公の人物像がメチャ面白かったのが、映画『T.R.Y.』（03年）の織田裕二扮

するペテン師、伊沢修（『シネマルーム2』217頁参照）。そして、主人公が最高のペテン師という点では、『リボルバー』は『T.R.Y.』の系譜！

もっとも、これはあくまで弁護士兼映画評論家である私の感覚であって、他の映画評論家は誰もそんな見方をしないだろうから、聞き流してもらって結構。ちなみに私がこんな評価をするのは、過去ガイ・リッチー監督とジェイソン・ステイサムがタッグを組んだ『ロック、ストック&トゥー・スモーキング・バレルズ』（98年）や『スナッチ』（00年）を観ていないからかも……？ つまり、それを知らないから、勝手に（自由に？）私流のイメージをふくらませることができるわけだ。

もっとも、私は『T.R.Y.』における伊沢修の国家を操る華麗なるペテン師ぶりに大いに感心し、感動すら覚えたが、『リボルバー』におけるジェイソン・ステイサムのペテン師ぶりはかなり異質な点に注意が必要……？

ストーリー形成の核となる4つの格言とは……？

主人公ジェイクが刑務所暮らしを余儀なくされたのは、彼が冷酷卑劣なカジノ経営者ドロシー・マカ（レイ・リオッタ）の下でディーラーをしていた際に、賭博場で起きた傷害事件の罪を被せられたため。したがって、この映画の基本ストーリーは出所したジェイクのマカに対する復讐物語だが、そう一筋縄に進まないのがこの映画の特徴。そして、『シックス・センス』ばりの謎解きが最大のミステリーなのだが、私が興味深かったのは、次の4つの格言が再三再四登場すること。すなわち、

- ①「最大の敵は思いがけぬ場所に隠れている」（J・シーザー、紀元前75年）
- ②「上達する唯一の方法は強敵との勝負」（チェスの基礎、1883年）
- ③「投資した金を守れ」（銀行家の心得、1775年）
- ④「戦争回避は敵を利するのみ」（マキアヴェッリ、1502年）

多少こじつけの感がなきにしもあらずだが、これらはいずれも人間が生きていく上で肝に銘ずべき格言だから、参考になることはまちがいない。したがって、この映画を楽しむには、ストーリー形成の核となるこの4つの格言からのアプローチが有効……？

キーマンは謎の2人組！

ジェイクが7年間の刑務所暮らしの中で「究極の勝利の方程式」を身につけたのは、

両隣の独房にいた「詐欺の達人」と「チェスの天才」という2人の謎の人物からペテンの方程式を学び、ゲームのテクニックに磨きをかけたため。

出所後直ちにマカのカジノに乗りこんだジェイクは、そのテクニックを駆使してゲームの席でマカをコテンパンにやっつけ、大金を巻き上げたが、そんなことをして大丈夫なの……？ だって、マカは情緒不安定ながら百発百中のヒットマン、ソーター（マーク・ストロング）やその相棒のスリム・ビギンズ（アーティン・ハードマン）など、物騒なヤツをゴマンと抱えている暗黒街の大物なのだから。

そんな心配をしていると、案の定ジェイクはソーターからの襲撃を受けることに。そこでジェイクの命を救ったのが、謎の2人組ザック（ヴィンセント・パストーレ）とアヴィ（アンドレ・ベンジャミン）だ。この2人は、映画の冒頭から頻繁に登場するジェイクの「心の声」とやらを読みとることができるらしい。そして、7年間の刑務所暮らしの中でお世話になったのが「詐欺の達人」と「チェスの天才」なら、出所後お世話になるのが、全財産を引き渡すことを条件にジェイクの命を守ってやると約束する、あこぎな高利貸しを標榜するザックとアヴィの2人組。

しかし、そんな偶然ってあるの……？ ひょっとしてこの2人組は同一人物……？ また、いかにも生きているように振る舞っていた主人公が、実は既に死んでいたというオチがついていた『シックス・センス』と同じように、ジェイクの心の声を読めるというザックとアヴィはホントに存在するの……？ そんなこんなを考えながら観ていると、疲れることおびたしい。しかしどちらにしても、ザックとアヴィという謎の2人組がキーマンとなることはまちがいない！

ケットタイなキャラが次々と……

カジノを経営するジェイクの宿敵マカは暗黒街の大物だが、実はその上にいるのがミスター・ゴールド（???）という伝説の支配者らしい。そして、その忠実な側近がリリー・ウォーカー（フランチェスカ・アニス）であり、マカと敵対するチャイニーズ・マフィアがジョン卿（トム・ウー）というからややこしい。リリーはトレードマークの黒のサングラスがよく似合う奇妙な女だが、細面で華奢な体形のジョン卿も、いかにもクセのある悪人という雰囲気がいっぱい。

これに比べると、側近のポール（テレンス・メイナード）に怒鳴り散らし、やたらソーターに命令ばかりしているマカが単純で善良そうに思えてくる（？）から不思議。

回転銃を意味する『リボルバー』というタイトルにふさわしく、こんなケツタイなキャラが次々と登場し、物語が次々と展開していくからとにかくややこしい。しっかり、ついていかなければ……。

基本ストーリーだけを少し

カジノの経営者であり、暗黒街の大物であるマカのもう1つの顔はドラッグ・ディーラー。つまり、あくどい「白い粉」の取引で莫大な利益をあげているわけだ。そこで思い出すのが、07年11月29日に観たデンゼル・ワシントンとラッセル・クロウの二大スター対決が見モノの『アメリカン・ギャングスター』(07年)。そこでは「白い粉」取引をめぐるすさまじい現実が描かれていたが、『リボルバー』の基本ストーリーもそれに近いもの……？

つまり、ザックとアヴィの2人組がマカの金庫から大量のドラッグを強奪したことから生じる、マカとミスター・ゴールド(その側近のリリー・ウォーカー)、あるいはマカとジョン卿との抗争がミステリアスに(?)描かれていくわけだ。そして、その中で右往左往させられるのが主人公のジェイク。だって、「ある事情」によって完全に2人組に屈伏してしまったジェイクは、今や何がホントで何がウソか? 何が本筋で何が罠か? がわからないまま行動せざるをえなくなっていたのだから。しかし、ジェイクって、刑務所の中でペテンの方程式を学び、「究極の勝利の方程式」を身につけたのではなかったの……? 誰しもそう思うし、私もそう思いながら観ていたのだが、それがガイ・リッチー監督が観客を騙すためのテクニク……? それ以上は書けないので、ご勘弁を……。

ヒットマンは意外と人情家……?

出所後ジェイクがカジノでマカをコテンパンにやっつけたことによってジェイクの命が狙われ、それをザックとアヴィの2人組が助けたことは既に紹介したとおり。そこで執念深いマカが目をつけたのが、ジェイクの兄ビリー(アンドリュウ・ハワード)とその娘レイチェル(エレイナ・ビニッシュ)。つまり、「弟の居場所を教える!」「弟と連絡をとり、呼び出せ!」という脅しだ。マカは暗黒街の大物だけに、やるのがえげつないのは当然。

その結果、ビリーはマカの側近のポールたちから手ひどい拷問を受けるわけだが、

そんな姿を見て急遽反旗を翻したのが、あのヒットマンのソーター。つまり、お嬢ちゃんの目の前で残忍な拷問行為を展開するポールたちの姿に耐えられなかったらしいから、ビックリ。こんなシーンを観ていると、ソーターは意外と人情家？ と一瞬思ったが、それは単に情緒不安定なだけかも……？ その解釈はともかく、映画中盤にはこんな意外な「抗争」シーンも登場するから、お見逃しなく。

閉所恐怖症が大きな伏線に

『トランスポーター』（02年）や『ミニミニ大作戦』（03年）で過激なアクションを見事に演じていた、長身でカッコいい俳優がジェイスン・ステイサム。そんな男に高所恐怖症や閉所恐怖症などの弱点があるのは少し不思議だが、さかんに流れてくるジェイクの「心の声」を聞いていると、彼は閉所恐怖症らしい。したがって、カジノに乗りこんだのはいいものの、20階まで上がってこいと言われると、エレベーターを避けて階段で行こうと言い出す始末。

エレベーターを小道具とした最高傑作はジャンヌ・モロー主演の『死刑台のエレベーター』（57年）だが、『リボルバー』のクライマックスシーンではエレベーターが12、13、14階あたりで突然停止し、ジェイクがその中に閉じ込められるから、お立ち会い！ 「映画の結末は絶対に明かさないで下さい」とクギを刺されているから、これ以上書けないが、お後はあなた自身の目で。

あなたは『リボルバー』派？ それとも『アフタースクール』派？

3月28日に観た内田けんじ監督の最新作『アフタースクール』（07年）は、同級生をキーワードとした騙しのオンパレード。そして、良質なユーモアと人生訓がいっぱい詰め込まれた傑作。

『リボルバー』もそれと同じように騙しのオンパレードで、誰が誰をどう騙しているのが最大のポイント。しかし、『アフタースクール』と決定的に違うのは、第1に『シックス・センス』ばりの、実在しているの？ それとも幻想？ という得体の知れないミステリー的要素が含まれていること。もっともそれは、映画のつくり方だから、どちらが良く、どちらが悪いというものではない。

しかし、『アフタースクール』とは異なる第2の点で私が気に入らないのは、やたらめったらジェイクの「心の声」が聞こえてくること。半世紀以上前の無声映画なら、

状況説明や心理描写のため字幕を使わなければならないのは仕方ないが、あらゆる技術が発達した今、ナレーションの多用が観客を興ざめにさせるのと同様、心理状態をいちいち「心の声」で示すのはいかがなもの……？ それを演技で表現してこそナンボのもの、と思う私には、あの「心の声」はうとうしかった。

そんな対比のうえで、さてあなたは『リボルバー』派？ それとも『アフタースクール』派？

2008(平成20)年5月13日記

ミニコラム

高さ1 km 超のビルに神の怒りは？

『ALWAYS 三丁目の夕日』(05年)で昭和と高度経済成長の象徴だった高さ333mの東京タワーの建替え計画が進んでいる。墨田区に建てられる新タワーの高さは610m。

現在日本で1番高い295.8mの横浜ランドマークタワーを抜いて2014年に高さ日本一になる予定の阿倍野橋ターミナルビルは高さ約300mだから、たかが知れたもの。これに対して、現在高さ世界一のビルは台湾の台北101で、101階、高さ509.2m。08年8月に完成した上海環球金融中心は101階、高さ492.3m。もっとも頂上の塔部分を除いた建物部分のみの高さではこちらが世界一らしい。

そんな数m差のトップ争いを尻目に、いきなりダウンと1 km 超の超高層ビルの建築計画が08年10月5日に発表された。それは、アラブ首長国連邦の不動産開発会社ナキール社がドバイに建

設するもの。200階以上、1 km 超という完成予想模型はまるでロケットのようだ。「ハーバー・アンド・タワー」という都市開発計画では、270ヘクタールの区域内にこの超高層ビルの他、高さ250~350mのビル40棟を建設。5万5千人以上が居住、4万5千人以上が就労する都市をつくるというからすごいが、心配もある。

その第1は、完成には10年以上かかる見込みだが、その間ずっと原油高で潤うアフリカの産油国に世界の投資資金が集まるのか、ということ。アメリカ発の世界的金融危機が広がり深化している昨今、私はそんな心配でいっぱい。そして第2は、人間によるバベルの塔建設に怒った神は人々に違う言葉を話させるようにしたが、2度目の神の怒りは大丈夫？

2008(平成20)年10月25日記